小説自民党

次を狙(ねら)う男たち

大下英治

NON POCHETTE

◆「ノン・ポシェット」創刊のことば

ノン・ポシェットは、ノン・ブック、ノン・ノベルの姉妹シリーズです。しかし、ポケットなり、ポシェットなりに楽に入る小さな判型、また既成のノン・ブック、ノン・ノベルから生み出されたという事情からいっても、むしろ両シリーズの子どもと申せましょう。

両シリーズの数ある本の中から、豊かな心、深い知恵、大きな楽しみに満ち、年月を経ても色褪せない「現代の古典」となるべきものばかりを厳選したつもりです。どうか親版のノン・ブック、ノン・ノベル両シリーズ同様、このノン・ポシェット・シリーズをご愛読いただき、進んでご意見、ご希望を編集部までお寄せくださるよう、お願いいたします。

昭和六〇年八月一日

NON・POCHETTE編集部

●ノン・ポシェット—NPN151

小説自民党 次を狙う男たち

平成元年10月20日　初版第1刷発行
平成元年11月20日　第3刷発行

著者　大下英治
発行者　伊賀弘三良
発行所　祥伝社
東京都千代田区神田神保町3-6-5
九段尚学ビル　〒101
☎03（265）2081（営業）
☎03（265）2080（編集）
印刷所　萩原印刷
製本所　関川製本

万一，落丁・乱丁がありました場合は，お取りかえします。　Printed in Japan.

ISBN4-396-32151-1 C0193
©1989,Eiji Ōshita

江苏工业学院图书馆
藏书章

小説自民党

次を狙う男たち

大村英海

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目　次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小沢一郎
海部俊樹
橋本龍太郎
渡辺美智雄
河野洋平
石原慎太郎

1章　戦国自民、「無印（ノーブランド）」後継者の時代 ―― 7
2章　竹下登（たけしたのぼる）「院政」の開幕 ―― 71
3章　総理、その「下半身」の条件 ―― 139
4章　なぜ、橋本龍太郎（はしもとりゅうたろう）は潰（つぶ）されたか？ ―― 183
5章　新旧「世代間戦争」の勃発 ―― 221
6章　次の覇者（はしゃ）は誰か？ ―― 285
――安倍（あべ）・渡辺（わたなべ）・宮沢（みやざわ）VS.ネオ・ニューリーダー

1章　戦国自民、「無（ノー・ブランド）印」後継者の時代

1

平成元年四月二十五日午前九時十六分、竹下登首相は、国会内の大臣室で、伊東正義総務会長、渡辺美智雄政調会長、山内一郎参院議員会長、橋本龍太郎幹事長代理党四役と会談し、はじめて辞意を表明した。

「リクルート事件に端を発した政治不信に対し、自らの責任を明らかにするため、当面平成元年度予算の早期成立に全力を尽くし、その実現を待って、身を引く決意を固めた」

伊東、渡辺、山内の三人は、あまりに突然のことに、おどろきを隠せなかった。まさか、この日に竹下が退陣を表明するなど、だれも予想していなかった。

竹下側近の橋本は、無念さに涙さえ浮かべていた。

逆に竹下は、顔色はやや青ざめていたが、表情はまったく変えなかった。竹下は、いついかなるときも、表情を変えることはない。

この瞬間から、自民党内に、後継総裁をめぐっての大混乱が起きた。

この日午前十時一分、「竹下派七奉行」のひとり、渡部恒三国対委員長は、国会内の廊下で竹下首相とすれちがった。

渡部は、竹下首相に深々と頭を下げた。

竹下首相は、渡部の手をにぎり、無言のまま肩をたたいた。渡部は、国対委員長として、竹下

退陣に無念の涙を呑んでいた。

〈故川島正次郎が、「政界は一寸先は闇だ」と言ったが、これほど一寸先が闇だったことはない……〉

この一月から、今日まで、まるで三年も経ったような気がしていた。それほど、毎日毎日が苦難の連続であった。

消費税の税制改革を推し進めているときは、苦労は承知ながら、まだ希望はあった。

軍を率いて、日露戦争の旅順攻略の際の激戦地、二百三高地を攻め落とす心意気であった。

税制改革を成功させれば、少なくとも竹下内閣は、二期四年はつづく。そう確信していた。

が、平成元年に入って内閣改造がおこなわれ、リクルート議員は、狙い撃ちにあった。

長谷川峻法務大臣が辞任に追いこまれ、原田憲リクルート問題特別委員会委員長まで辞任した。それ以後は、まるで第二次世界大戦中、日本軍が撤退をよぎなくされたソロモン諸島のガダルカナル島の戦いの隊長の心境であった。

野党と話し合い、なんとか国会が審議に入れるか、と思うところに、まるで計画的なくらい、だれだれが何千万円リクルートから献金を受け取っていた、という情報が表に出た。

ようやく治まったかな、と思うと、また狙い撃ちされる。

平成元年に入り、晴れ間はまったくなかった。どしゃぶりの雨が降りつづく心境であった。

竹下は、やれ二塁を回ったとか、三塁をうかがったとか言われるより、思いきって打って出る

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

作戦に出た。

徹底的に調査し、四月十一日の衆議院予算委員会で、自らリクルートからのパーティー券、献金などについてすべて報告し、釈明をおこなった。

リクルートグループからの資金提供は、六十年に五百万円の寄付、六十一年には寄付、勉強会費、青木伊平元秘書名義などでの未公開株売却益を合わせ六千六百万円で、六十二年分のパーティー券八千万円をふくめ、三年間で一億五千百万円と、表に出ていなかった金額まで明らかにした。

そのとき竹下首相は、「これで終わりと断定できるか」と確認を迫る野党議員に、「神様ではないから、あとから何が出てくるか非常に申し上げにくいが、わたし自身、まったく予測しない。今後、出てくることはないであろうと確信を持っている」と述べ、可能な限り正確な内容を公表したことを強調した。

ところが、その十一日後の二十二日の朝日新聞の夕刊一面トップに、竹下の元秘書青木伊平が、総裁選の闘いのため、リクルートから、さらに五千万円借りていたことがスクープされた。

その五千万円は、すでに返却されていたので、青木は竹下に報告していなかったのである。

《竹下首相周辺にリクルートグループから一億五千万円余りの実質献金が渡っていたが、自民党総裁選のあった昭和六十二年、元秘書の青木伊平名義で、リクルート前会長江副浩正（五二）＝贈賄罪で起訴＝から五千万円を借り入れていたことが二十二日、新たにわかった。竹下事務所

も同日、青木元秘書名義での借り入れの事実を認めた。五千万円は総裁選のための資金調達とみられるが、同事務所は「数カ月後に返済した」とだけ説明している。この借り入れ分をふくめると、リクルート側から竹下氏への資金協力は三年間に総額二億円にのぼる〉

この五千万円が、最後の引き金となった。竹下は、ついに首相の座を降りることになってしまったのだ。

渡部恒三は、臍を噛んでいた。

〈消費税と、リクルートが重なってスまったのが、命取りになってスまった。どちらかひとつだけなら、なんとか持ちこたえることができたのに……〉

国対委員長として、竹下首相に、

「消費税は、もっとゆっくりやりましょう」

と進言してもよかったのではないか、と考えることもある。

いや、せめて税制改革という歴史的な大事業を成し遂げたことが、後世の史家に大きな評価を受けるだろう、と自らを慰めることもある。

いずれにしても、税制改革は、六十二年の竹下、安倍晋太郎、宮沢喜一の三人による、ポスト中曽根をめぐっての総裁選のとき、中曽根から竹下が総理指名を受ける条件であった。

〈いまになってみれば、中曽根氏から指名を受けるんじゃなかった。やはり、闘い取っておけば、なにも消費税を急ぐ必要もなかった。中曽根氏の証人喚問も、もっとはやく応じることができた〉

しかし、すべてあとの祭りであった。

この日午前十時三十五分、竹下派のなかでも、もっとも竹下に信頼の厚い小沢一郎官房副長官が、国会から首相官邸に姿をあらわした。記者団が、さっそく訊いた。

「辞任を、いつ知ったか」

「今日、電話があって」

と苦笑したが、すぐに顔は強張った。

午前十時五十五分、伊東総務会長は、国会内の自民党総務会長室を出て、総務会へ向かった。廊下で記者に、マイクを突きつけられて訊かれた。

「後継の打診は、あったか」

伊東総務会長は、憤然と答えた。

「こういうのを、マスコミの暴力というんだ」

竹下は、午前十一時半、首相官邸で緊急の記者会見に臨み、退陣を表明した。

「最初に簡単だが、国民のみな様へ、という気持ちで書き下ろしたものを朗読させていただく。リクルート問題に端を発する今日の深刻な政治不信の広がりは、わが国の議会制民主主義にとり、きわめて重大な危機だ。このような事態をまねいたことに対し、政府の最高責任者として、また自民党総裁として責任を痛感している」

ここで一度顔を上げ、また固い表情で読みはじめた。

「とくに、わたしの周辺をめぐる問題により政治不信を強めてきたことについて、国民のみな様に深くお詫びを申し上げる。政治に対する国民の信頼を取りもどすために、わたしは自らの身を引く決意を固めることにした。しかしながら、国民生活にとってきわめて大きな意味を持つ平成元年度予算は、今日にいたるもなお国会審議の見通しが立っていない。わたしは、全力を尽くして新年度予算成立をはかり、その実現を待って、自らの決意を実行に移す考えであります」

「政治不信が、ここまで広がると考えていたか」

竹下首相は顔を上げ、記者のその質問に答えた。

「リクルート問題が今日のような政治不信を惹起させる大きなうねりになるとは、思っていなかった、と率直に言うべきだと思っている」

「どの点で世論を見誤ったのか」

「わたし個人の反省で言えば、政治活動と私生活とをいかに遮断しても、その分野における金の問題と個々の私生活の間に、あまりにも問題があった」

竹下は、後継問題については、

「自民党で総裁が職を辞した場合、いろいろ手続きがある。辞めていくわたしが、とやかく予見を言うべきではない」

とだけ語った。

竹下は、リクルートからの献金問題が次々と明らかになり、苦境に立つたびに側近らに言って

いた。

「わたしは、政権の座に恋々としない。しかし、政権の受け皿がないではないか」

退陣表明の四十八日前の三月八日、竹下は、竹下派の一回生鳩山由紀夫と四回生鳩山邦夫の兄弟代議士に、首相官邸二階の首相執務室で、戦後内閣の一覧表を見せながら、さばさばした表情で言った。

「おれも一年と四カ月、総理総裁として務めさせていただいた。石橋湛山内閣はもとより、片山哲や芦田均内閣よりも、長くつづいてきたんだよ。まあ、税制改革もやったし、思い残すことはないね」

そのとき、すでにいつ辞めてもいい覚悟はしていた。が、タイミングが問題であった。

本来なら、安倍晋太郎幹事長、宮沢喜一前副総理ら党内実力者が受け皿となるはずだった。が、両者とも首相と同様リクルート疑惑の泥沼にどっぷりつかっており、その資格を失っている。

竹下は、辞任する腹を固めたとき、すでに後継総裁として伊東正義に白羽の矢を立てていた。

〈伊東さんをおいて、ない……〉

2

じつは、竹下は、前年の十二月、消費税の法案を通す直前に、伊東とふたりだけの席で重大な

ことを頼んでいた。

「伊東さん、もしこの法案が通らなければ、わたしは総理を辞めることになるかもしれん。そのときは、伊東さん、あとを頼みますよ」

伊東は、あまりに突然のことに驚き、固辞した。

「自分は、そんなことは……」

伊東は、十歳年下の竹下を励ました。

「そんなことは考えないで、頑張りなさい。わたしは、最後まで応援しますから」

それ以来、竹下の脳裡には、万一のときには伊東に、というシナリオが離れなかった。

〈まず伊東に繋いで、それから政情を鎮め、安倍ちゃんに渡すようにしよう……〉

竹下は、伊東と大変にウマも合った。

安倍は、幹事長であっても、伊東にけっして相談して来なかった。

渡辺美智雄も、伊東に相談したことはない。党四役の集まりでの打ち合わせが終わると、話をすることもない。

渡辺は、当選九回だが、伊東は、当選八回である。

渡辺は、つねづね伊東のことを、こう言っていた。

「伊東は、もっとも自民党的だったが、一回落選してからは、きれいごとを言うようになった。おれはきれいごとを言うやつは、きれえだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com